



復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

復活した主は全世界を照らす光

あらためてご復活おめでとうございます。わたしたちは昨晚の復活徹夜祭で光の祭儀を行い、復活した主が、わたしたちの心の闇を照らし、導いてくださる方となっておられるのを体験しました。

ローソクの光は、使い方によって2つの照らし方をすると思います。光の祭儀では、復活賛歌を歌うために、侍者たちにローソクで手元を照らしてもらいました。1つの働きは、手元を照らすということです。

また、洗礼の約束の更新では、全員復活のローソクから火をともし、信仰を宣言しました。これは自分たちの信仰を互いに確かめ合い、また世に向かって信仰を宣言するための働きでした。ローソクの光のもう1つの働きは、世を照らすということです。

復活の主日の日中の典礼で朗読される福音は、ヨハネ福音書が決まって朗読されます。与えられた朗読の中で、「見る」という言葉がいくつかの違った働きをしています。それはたとえば言えば、ローソクが手元を照らす働きと、世を照らす働きに使われるようなものです。

マグダラのマリアは墓に行き、「墓から石が取りのけてあるのを見た」（20・1）とあります。彼女の目は、いわば手元を見ただけでした。そのため戻って弟子たちに報告する時も、「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません」（20・2）という報告にとどまったのです。

ペトロともう一人の弟子は、外に出て墓へ行きます。先に墓に着いたもう一人の弟子がペトロに続いて墓に入って来たとき、マグダラのマリアとは違う結果になりました。「見て、信じた」（20・8）のです。もう一人の弟子の目は、手元を見ただけではなく、自分たちが見ている出来事の本当の意味まで深く見通したのです。

そこには、ただ手元を見るだけの見方とは違った見方があることが分かります。たとえば旅行に出かけるとき、船に乗っている知らない幼子が泣いているとして、泣き止んでほしいなあと思って見るのと、微笑ましいなあと愛情をもって見るのが違っていているようなものです。

イエスが愛しておられたもう一人の弟子は、自分が深く愛されていたことを思い起こしながら、空の墓を見つめたのです。そのことで、イエスは復活して、わたしたちの救いを成し遂げられた、わたしたちにまた愛を注いでくださる方とされたことを見通したのです。

イエスが愛しておられたもう一人の弟子に倣いましょう。日々の出来事の意味を考えると、愛情を持って出来事を見ると、すべてが神からの贈り物として受け止めることができるようになります。復活した主は今わたしたちの手元だけでなく、全世界を照らし、愛によって治め、導いてくださるのです。